そこで初めて、「つ」は今における動作完了を表わすほか、過去や未来における完了や、または、時には関係なく一般的な事柄としても表わされ、「ぬ」は過去・現在・未来という具体的な時間をもってあらわれ、あるいは時を越えた一般的な事柄としてあらわれるが、いずれも「そのような状態が発生した」または「そのような状態が発生する」という「状態の発生」を表わすことを意味とするものであるということになるのである。

〈和泉式部の表現上の特質〉

――歌と日記との心情の関連において――

第二回卒業　川島　和枝

序論

和泉式部は「うかれ女」といわれてもしかたのない状況に身を置いている。状況という現象面から「うかれ女」と断定し、作品の価値をも規定するものではない。表現上の特質を考察することにより、和泉式部の心情の本質や、作品の価値を定め、また日記と歌集の関連性を追求することにより、和泉式部日記の作者について推論を試みたい。

本論

Ⅰ　帥の宮挽歌群について

帥の宮挽歌群を構成する一首一首の哀傷歌に表現された和泉式部の心情は、夢の中でさえ会えないほど、つまり一睡もできないほどに、そして和泉式部の生活すべてに、「君をしのび」、「よりてかへてまし」と、帥の宮を悲しんでいる。ここにはかり知れないほどの嘆きを理解することができる。

和泉式部の悲しみ、嘆きは、何によって慰められるのであろうか。他の男の慰めでは、悲しみは消えない。他の辛さも、嘆きを紛らわせてはいない。失った対象の偉大さを、失うことにより自覚した時、その慰めは、帥の宮でなければならず、宮との一体感を感ずることによってのみ慰められるのである。それは、具体的には「あかざりしむかしの事」を書くという行為にほかならないのである。二人の愛の世界――一体感の自覚――の完成を書かずにはいられず、「和泉式部日記」の中に再び二人の愛の極致の追求が試みられたのである。ここに書くという内面的必然性ともいうべきものを認めることができる。

Ⅱ　人物描写について

1章　帥の宮と女の描写

――帥の宮――

帥の宮は、小舎人童が女に語る言葉の中に「帥の宮」とあり、これからあらわれる宮が帥の宮であることを示している。宮の描写は14ヵ所あり、容姿、状況、性質共に具体的に「なみなみならぬ容姿」と、まめな心を持つ宮のすべてを、賛美するかのように、理想の男性像として描れている。

――女――

女は、和泉式部だという提示はない。また、宮には容姿についての描写が繰り返されたが、女の場合一言の描写も認められない。

女の人物描写において、女への世評（侍従の乳母の言葉・ある人々の会話）としての描写は、ある程度の非難の込められた表現「状況的あだ」を認めることができる。それに比べると、女に対する帥

の宮の感想は、女の本質的なものへの理解「性質的まめ」が読みとれる。Ⅰで述べた嘆きは、本質を理解する人を失った為と考えてこそ、その深い嘆きを我々が理解できるのである。

次にこれらの描写が、地の文、会話文、心中思惟のいずれに属するかを調べると、女と帥の宮の人物描写は、大部分が心中思惟、会話文により表現されている。しかも帥の宮の描写は、女の心中思惟に、女の描写は、帥の宮の心中思惟により表現されている。女の宮に対する讃美と、宮の女に対する同情的ともいえるほどの理解を、基調としている。この基調を伴い、女が帥の宮をいかに感じ、帥の宮が女をいかに理解しているか、という主観的描写である。

2章　その他の人物の描写

小舎人童、右近の尉、北の方、侍従の乳母の人物描写は、前に述べた二人とは、はっきりした違いを指摘できる。各一例を除き、名前のみ、または指示語がついているだけである。その例外も、帥の宮と女の描写を補う表現であり、脇役としての性格づけがなにもなされていない。

3章　他の男の描写

他の男の描写は、「男」のいることを認めた上で、物語の進行に沿い、そして、女の帥の宮に対する感情が高まるにつれて、また、帥の宮が女を深く理解するにつれて、変化するのである。女の内面から沸き上がる、恋愛感情の起伏高揚に伴い、曖昧な表現、現在形、過去形、「はかなきたはぶれごと」「よからぬ人々」という認識に変化し、女の立場に立った表現描写がなされている。

4章　人物描写

人物描写の表現を探ることにより、「和泉式部日記」は、帥の宮と女のひたむきな恋を、他の無関係な事柄をすべてふり捨てて、女の立場から、女の感情を基調にし、女自身が書いたものだと考えるのである。

結論

「Ⅰ　帥の宮挽歌群について」の項で、書く内面的必然性を見いだし、「Ⅱ　人物描写について」の項では、「女」の立場から、二人の愛の極致の追求を、他の無関係なことをすべて振りすてて、書くことが主題であることを推察した。

「和泉式部日記」は自己の恋愛を形象化したものであり、新たな創造の世界として、人生の真実性が、我々に訴えるものである。

＜良寛の歌とその一生＞

第三回卒業　若海　知子

良寛という人物のいろいろな面をみるために趣きの異なった、いくつかの歌をあげてみる。

1　かすみたつ長き春日を子供らと手毬つきつつ此日くらしつ

2　飯こふとわが来しかども春の野にすみれつみつつ時をへにけり

3　のみしらみねになく秋の虫ならばわがふところはむさしのの原

4　行くさ来さ見れどもあかぬ岩むろの田中に立てる一つ松あはれ

5　みちのべにすみれつみつつはちのこをわが忘れてぞ来しあは